

## 〔図書紹介〕

大田 堯著

## 『教育とは何か』

長崎 明



(岩波新書版 五二〇円)

大田先生は五年前、本研究所の設立総会の際「私たちの望む教育改革」と題して記念講演して下さいました。私が最も感銘を受けたのは、「人間が二本足で立って歩くようになったのは、人間がその気に

なったからだ」・「人間は、めあてをもつて選びながら発達する動物だ」・「子育て・教育の勘所は、子どもがめあてをもって選ぶ力を蓄えてあげることだ」などであった。その理由は、私が小学六年のとき理科事典に「人間はサルから進化した動物」とあるのを読んで「神様である天皇陛下の先祖は、神様のサルだったのか」との疑問を抱いて以来、人一倍進化論に興味を持っていたのと、農学研究者の立場から見て、生物学と教育学との接点に触れた思いがしたからであった。

大田先生の講演後はじめて七年前の著書「教育とは何かを問いつづけて」を読んで、先生が終戦直後の混乱の中で、広島県本郷町をはじめ多くの農村調査をふまえて教育のありかたを探究し、福島要一・今和次郎・西山卯三・福武直・大内力・加藤一郎などの諸氏との間に親交があったのを知って、「そうだったのか、そこに先生の原点があったのか」と気付いた。福島氏は、丁度そのころ農林省農

事試験場鴻巣試験地にいた私の思想上の恩師であった。私が農業工学の学徒でありながら農村調査の手法を採り入れたのも、同じく戦後の体験によるものであった。ひょっとすると大田先生が鴻巣に近い吹上町を調査したのは福島氏の示唆によるのかも知れない。学問研究には、こうした実践と理論・総合的視点と分析的視点を必要とするが、その典型は恐らく教育学と農学であろう。大田先生への強い関心をそられたのは、こうした背景があつてのことである。

前著「教育とは何かを問いつづけて」では、「ひとなし」・「ひとなる」に象徴される教育観に至る過程が語られているものの、教育そのものについては、それほど深く触れられてなかった。それは「——問いつづけて」の性格によるものであったろう。本著「教育とは何か」では正にそこに焦点が絞られている。

本書カバーに、「美しい地球環境を取り戻すために教育に何が出来るのか」と

いった意味の問いかけがあり、「祖先からの子育ての知恵をも振り返りつつ、現代における教育の意味と役割を問い直す」とある。

「第一章 子育ての意味」では、個体保存と種の持続が生物のいとなみの基本であり、人類もその延長線上にあるにもかかわらず、今日かなり根本的な世直し・子育ての改革が求められている、と問題提起している。

「第二章 人の子育て」では、祖先から伝承されてきた育児行動についての柳田民俗学を教育の側から追っている。そして、立って歩くことが人間の「種の持続」にとってどんなに重要視されてきたかを実証的に述べ、「こうした人間という動物種の特徴が間違いなく次代へと伝えられるかどうかは、複雑な教育制度・教育事象を根本から点検する際の目安となり得ることは確か」と結んでいる。

「第三章 ヒトが人になるとはどういうことか」では、めあてをもって行動す

る人間本来の生き方が失われた現代社会の問題に触れ、「第四章 人間の可能性はどこにあるか」では、ヒトが人間になる基本的要因は意図的で積極的な分別・選択する能力の生涯にわたる発達にある、としている。

「第五章 ヒトが人であるために」では、痴呆性老人の介護を例に引きながら「説得より納得」の教育——「教」と「育」を逆転させる発想の必要性を説くとともに、文化を学び伝える教育の役割にも触れている。「第六章 文化の中で育つ」は、子どもの遊びに見られる模倣と創造からして、今の教育改革を「子供を主人公にする」・「学校をもっと無力にする」方向に変えよ、と説いている。

「第七章 いま教育は」では、教育は人類的なもの・パブリックなものであるが故に、権力が介入すべきではないのは勿論、親の私有物でもないとし、こうした子どもの人権のためにこそ国連で「子どもの権利条約」が採択されたと述べ、

「第八章 人権としての教育」では、地球上の全ての人間が未来へ向けての人類的課題に参加することの必要性を強調している。

大田先生のように、生物の進化の過程のもとでの人類の発達を人間の教育の基本に据える考え方が、教育学全体の体系の中で、どういう位置付けになるのか、今の私には分からないが、農学との共通点を見出すことによって、教育が身近なものになったことは確かである。子供に教育に関心を持つ多くの皆さんに是非とも一読をお奨めしたい。

(ながさき あきら) 新潟大学名誉教授

~~~~~

※ 「書評」欄への投稿を歓迎します。

本文(書名、著者名、発行所名を除く)四〇〇字詰原稿用紙で四枚半。本の写真、若しくは鮮明なコピーを添付してください。

(編集部)